

趣味、嗜好が反映されたお墓

第9回では神奈川県横浜市金沢区の高杉博子さんは、愛煙家であった亡きご主人のために、タバコ尽くしのお墓で特別賞を受けた。応募した「マイルドセブン」を模した箱型お墓は「マイルドヘブン」と洒落、2本のタバコのフィルターが飛び出している。香炉には1本の吸いさしのタバコが置かれ、そこに線香を置くとタバコの煙のようにゆらゆらと立ち上る。ライター型の燭台、花立は好きだった缶ビール……と、至れり尽くせり。現世では愛煙家は肩身が狭くなっているが、何の気兼ねもなくスパスパやって下さい、という思いやり。



第11回の大賞は大阪府守口市の森 美智子さん（当時59歳）が受賞した。

魚釣りが好きだった夫が天国でも釣り三昧できるようにと、大きなスズキを中心に、釣竿やタモ、クーラーボックスまで配置した「とと型お墓」（お魚型お墓）だ。水入れが帽子、線香立てが懐中電灯、花立てが長靴型という凝りよう。

森さんが亡き夫のために家族と相談しながら何ヶ月もかけて完成させた。お墓には「TOTO」と刻んである。魚の「とと」と父親の「とと」をダブらせ、家名ではなく「TOTO」を選んだという。釣り仲間への挨拶だけでなく、お参りに来てくれた人に対しても「みんな元気で がんばってまっか 今日はおおきに すんませんなあ 森やん」の挨拶文が刻まれている。釣りが好きで、人が寄り集まるのが大好きだった人柄がよくにじみ出たお墓である。



第12回の大賞を受賞した大阪府岸和田市の神谷 千明さん（年齢58歳）は、競馬好き夫のために馬の夫婦レリーフ入りお墓。亡くなる直前の病室から、携帯電話で馬券を購入するほどの競馬好きだった亡夫のために、馬の夫婦をレリーフした墓石を建立した。本来なら愚痴の一つや二つが飛び出すのが当たり前のような気がする



が、からっとしている。どうぞあの世でも予想を楽しんでください、と送り出したその気風のよさは見事という他ない。作家に依頼して描いてもらった油絵をもとに、レーザー加工したお墓前面には、仲睦まじく寄り添う馬の夫婦が浮かび上がる。「私にとってはこれから、癒しの空間になるであろう大切な場所です」と神谷さん。

第12回では静岡県榛原郡の辻村 一宏さん（当時31歳）が、踊り好き母の扇子型お墓で入賞した。「踊りが好きだったお母さんへ・・・ありがとう」

いまだに信じられません。踊りが大好きで、着物姿で元気に踊っていた事を昨日の事のように思い出します。亡き母を思い、生前一番の楽しみであった踊りと共に・・・と石材店に相談して建てました。「扇志穂」という踊り名を受け、踊る際、いつも手に



していた扇子を両側面に再現し、着物を纏い舞台上で踊っている様なイメージとなりました。ふたつの白い石は、舞台照明という意味と2人の子供（自分と妹）を兼ね、いつも傍らで見守っていてほしいという願いを込めました。また花筒の手前には、生前母の書いた「ありがとう」という文字をそのまま彫りこみ、「お母さんへの感謝の気持ちを忘れずに・・・」という父の願いを込めました。